

正宗白鳥

漱石と二葉亭

漱石と二葉亭

明治三十九年は明治芸術史にて忘るべからざる歳なり。文壇不振芸苑寂寥とは、歳末年首に於て、批評家の常に口にする定り文句なりしが、五年十年の間を置いて過去を顧みれば、著^{いちじ}るき進歩ありしに驚かるるなり。小兒の脊丈の如く何時の間にやらのびて行くは明治文学の趨勢にて、耻かしからぬ大人に成るも遠きことにあらざるべし、殊に昨年は発育に一期を劃したる歳というべく、少くも小説と演劇との活気を呈したるは近年稀なる

所なり。前半に於ては、藤村氏の「破戒」獨歩氏の「運命」漱石氏の「猫」等、殆んど創作界の声望を独占したるが如く、紛々たる評家は只賛辞を捧ぐるに忙殺せられ、評家が作家に圧倒され、旧作家が新作家に屈服さるるこの年の如きは稀なり。後半期に移りても、如上の三家に對する世論はますます騒しかりしが、獨歩藤村両氏は自重して多く作らず、独り漱石氏の跋扈ばっこに任せたり。而してこの間に突如として現われ、堂々たる雄姿の、新作家を蹴倒さんとの意気込あるを、老將軍長谷川二葉亭氏とす。漱石氏の「草枕」が後半期の新聞雜誌批評の中心な

りし如く、二葉亭氏の「其面影」は作家評家の間に、常に話頭に上りつつあり。

漱石氏は英文学の大家にて、二葉亭氏は多年露国文学を翫味せる人なり。学殖深からざるを常とせし我小説界に、両氏の如く歐洲文学に通曉せる作家の出では異数というべし。而して両氏共に創作を専門とせるにあらで、其の余業たるも相似たり、小説に全身を捧げ小説的技倆を除けば、他はゼロたる諸作家とは異なるを見る。されど両氏は似たる点よりも異なる点多く、其の作風に於ては全然別種の者なり。

二葉亭氏は美妙紅葉諸氏と共に言文一致の開山にして、又翻訳界の泰斗なり。これ丈にても氏は明治文学史に特筆すべき功蹟ある人なるが、作家としても亦忘るべからざる人なり。吾人は「其面影」を読むにつき、翻つて「浮雲」を再読して、明治二十年頃、かかる作の現われしを今更ながら驚きたり。其の頃より近年までは硯友社風ならねば小説ならぬ如く思われ、評家も読者も脂粉の文字にまなこくら眼眩み、意気とかイナセとか、洒落や地口に小説の本領あるが如く感じ、人情本の焼直し、英米の二流以下の小説の煮返えしを有難がりたり。この間に二葉

亭氏は時々苦心慘澹大作の翻訳を試みしが、世は只筋や文章を味えど、内容は未だ解し得ざりしようなり。氏若し浮雲張ばりの小説を続出すると、決して読書社会の喝采を博すること硯友社派の如くならざりしならん。時未だ来らざりしなり。嵯峨の屋、不知庵諸氏の作も二葉亭氏と同じく、十分の光彩を放たざりしは、当時の読書社会の嗜好と程度を異にしたればならん。数年前までの硯友社諸氏の作の、今日となりては多く読むに堪えざるに反し、浮雲尚読むに足るべく、嵯峨の屋の「流転」不知庵の「暮の二十八日」等明治四十年の文壇に出すとも一

佳作たるを失わざるを見て、吾人は硯友社の側を流れし一小流を忘るべからざるを思う。今日以後の小説界は過去の硯友社の水流によって灌漑されずして、寧ろかの小流と水源を一にして発展するならんか。

今は二葉亭氏等の小説の充分に翫賞せらるる世となりぬ。「其面影」は廿年来鍛練の腕を揮いたるも、世人期待の大なるは、近時の小説に類なき所ならん、従つて未だ数回を重ねざる頃より至る所に其の評判を耳にす、而して結構の「浮雲」に酷似せりとは衆論一致すれど、巧拙如何については、意見まちまちなり。処女作以来さし

たる進境を見ず、作中の人物は全く「浮雲」中のそれと異らずして、今日より見ては旧式なりとは、一部の読者の批評にて、賛成者も少からざるようなり。吾人も初数回を読み、前作と類似するの甚しきを感じしが、技倆に於ては元より同一視すべからざるを認めたり。回を重ねる毎に布置整然として、地の文の洗鍊を経て一語苟いやくもせず、冗語なく稚氣なきを見、優に再読するに足るの妙味あるを覚ゆ。「浮雲」の作者が老熟の域に達しなば、かかる作をなすは自然の順序にて、氏は或種の作家の如く、其の小説に対する考の全く変化することなく、初め

歩み出したる道を進みて来りしなり。兎に角いわゆる所謂家庭小説家の描くような筋なれど、彼等のは全く面目を異にし、一篇の中心着想をめぐりて、人物光景が活躍し、無用の人物無用の事件を捻出して、作の生命を稀薄ならしむることなし。この点に於て漱石氏とは全然異なれり。漱石氏の作の多くは、岐路又岐路を生じ、殆んど帰着する所を知らざるを特得の長所とす。「二百十日」は円遊の落語の如く、面白くとも読終りて頭に何等の印象も残らず、貴族を罵倒する所など、宛然落語家の調子にて軽妙なり、圭さんや碌さん、又は草枕の主人公はどんな人

間やら更に分らず、又これを現わさんとするは著者の志す所にあらざるべく、自ら云える如く理窟でも何でも、筆に任せて、時々刻々の思付を面白く描けば足れりとし、従って読者も人間其物に興味を感じることなくして、屁の講釈、鏡の説明等の奇警なる観察の断片的に陸続出沒するに魅せられ、読み終つて啞然たり。「其面影」を読めば、明かなる印象残りて、多少思わしめらるれど、「草枕」を通読するも、人物の行動、心の移り変りが茫漠たり。非人情的女のあれど、非人情なるゆえか、人形の如く、フェヤリランド 仙郷クインの女王の如く、米を食くらう女とも思えねば、

吾人はこの女の行為に對して別に喜憂する必要なし。著者の唱道せる俳句小説はかくして成功したりというべけんか。而して早稲田文学記者などが、夏目氏の作を以て実生活に触れたりと云いしは、吾人の解し能わざる所なり。氏の作は「草枕」以外の者には大抵実生活の苦闘の影をも見せず、又これが氏の企つる所にて、俳句的小説という一派を立^{りつ}する所以なるべし。強いて藤村獨歩氏と並称するは鼻眞の引倒しならん、同じく警句に富むも、獨歩氏のは鋭利なる刃にて急所を刺し、漱石氏のは鋭くも針で突くが如く、多くは擽ったき位なり。

漱石氏は多年文学を研究し、これに多大の興味を感ぜし人ならんが、自から筆を執りて文壇に乗出さんとの野心は嘗て抱きしことなかるべく、偶然世間に認められて、遂に蘊蓄うんちくを傾くるに至りしなり。貧あわれなる脳漿を絞りて製造する作家とは異なり、素質ある人が多年の沈黙を破りて、一度に才を發揮したるを以て、読者は作自身の価値以外に多少意外の感に打たれて、瞠目して驚歎せしなり、其の大学講師たることも氏の名声を資質以上に高めし原因ならん、読書社会が千篇一律の恋愛小説に倦んで、軽妙にして呑気な者を求めし頃なれば、氏の作が自然に

其の需要に投ぜしも評家の言の如し。幸運の人と云うべし。されど過去一年間最も売行よく最も評判よかりし漱石氏の作が、今年も明年も同じ声価を維持し、漱石流の作風が文壇に流布するか否かは疑うべし。「草枕」の一篇に対し、評家が筆を揃えて絶大の賛辞を呈するは、買被りの気味なきに非ず。少くも自意識強く、当代の世波に心身を悩ます青年は、軽い美しい物語のみにては物足らぬ感ありて、もっと底深き人間の描写を見んと欲す。二葉亭氏等の執れる方面を更に深く進めたる者に接せんと欲す。而して「浮雲」以来、西洋近代の思潮の徐々と

して我文壇に流れ込み、江戸式の造花的文学、十八世紀張の皮相の小説の時を得顔に跋扈せる間に、後日真人生を描きたる小説の現わるる地歩を造りしは、二葉亭氏等の翻訳興って力あり。氏の事業は花々しからず、従って流俗に持囃さるることなかりしも、其の明治文学史上の功蹟は、決して鷗外氏の下にあるに非ず。

吾人は「其面影」を読んで、作自身に対する興味の外に、作家の過去半生を追想して敬意を表するを禁ずる能わざるなり。創作にても翻訳にても嘗て濫りに筆を執りしことなく、しかも文壇の表面に出でて大家顔をせんと

もせず、作文は氏の道楽に過ぎざるようにて、一作出ずる毎に専門家をして顔色なからしめ、二十年の長日月常に翻訳家として第一位にあり、文学上の見地亦時代に先さきだつとも遅るることなく、新作の小説も二三の老大家の如くに、衰頹を示すことなし。

漱石氏は健筆家なり、「草枕」の大作も僅かに十日間に書き上げ、「二百十日」は二日を費せしのみと。しかも文壇を驚かせしを以て見れば、氏は凡々の士ならざるべし。

この特色を異にせる両氏が、丙午後期の文壇に相並ん

で世を騒がせしは面白き現象なり。吾人は尚今年以後の
両氏の所作につき注意を怠らざらんとす。

日本文学電子図書館

漱石と二葉亭

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館